

触媒懇談会ニュース

触媒学会シニア懇談会

Fritz-Haber 研究所 100 周年祝賀会

北海道大学 朝倉清高

1911 年 Fritz-Haber 研究所(FHI)の前進 Keiser Wilhelm 物理化学及び電気化学研究所が開設され、2011 年はその 100 年目にあたり、¹ 100 周年記念祭が 2011 年 10 月 25-27 日に Berlin で盛大に開催されました。北海道大学触媒化学研究センターが FHI と友好交流協定を結んでいることと G.Ertl 先生のところに留学していたことから、この 100 周年に参加いたしました。

Keiser Wilhelm 物理化学及び電気化学研究所は、当時のドイツ皇帝 Wilhelm II が ” 講義、会議、試験の雑事に追われる ” 大学の教授たちに研究に専念させるため、Berlin 郊外の Dahlem に、Fritz Haber を所長として設立したものです。^{2,3} 2 度の大战を経て、FHI となりました。¹ FHI は今では、触媒、表面科学中心の研究所のように考えられていますが、FHI に改名した 1950 年台当時は、X 線回折学の Max von Laue が所長を務め、X 線や X 線小角実験、電子顕微鏡の最先端研究が行われていました。^{1,4} (電子顕微鏡部門では、一時期 Ernst Ruska が部門長を務めています。)

100 周年祭は 3 日間行われました。プログラムはホームページに掲載されています。⁵ 蒼々たるメンバーによる講演は実にすばらしかったです。1 日目は記念シンポジウムでした。講演もさることながら、驚いたことは、100 周年の祝賀シンポジウムに ” On the

initiative to rename the Fritz Haber Institute”⁶ というものが正式プログラムとして入っていたことです。Fritz Haber の功績だけでなく、負の面もしっかりと見据え、このめでたい席でも、名前を変えようという提案がなされるということは、日本ではとても考えられないことですが、それぞれが、しっかり考え、意見をいうというのが民主主義なのかもしれません。

Fritz Haber のもとへ日本からも研究者が留学しています。東大名誉教授の田丸謙二先生のお父上である田丸節郎先生もそのお一人でした。⁷ Fritz Haber と日本との結びつきはとても深く、宮田親平著 “毒ガス開発の父 ハーバ”² によると Fritz Haber の叔父 ルードビッヒハーバは 領事補として函館に赴任し、幕末の攘夷の犠牲となっているそうです。星一 星製薬社長 (作家の星新一のお父上) の招きで⁸、日本にこれらた時も函館に赴かれ、ルードビッヒ ハーバの 50 周年祭に参加されているそうです。その時に Fritz Haber から ”死ぬほど働く” と賛辞された田丸節郎先生のお宅を訪問されたそうで、そのときの写真が残されています。⁷ その写真を初めて拝見したのは田丸謙二先生が御退官になった 1984 年 3 月の最終講義の時と記憶している。田丸謙二先生が赤ん坊で写っているというお話しをされ、何か運命のようなものを感じたことを今でもはっきりと覚えて

いる。

田丸謙二先生は、FHI から特別に招待をうけ、お嬢様(秀子さん)とそのお婿さんの S.Ted Oyama 先生とご一緒に参加され、初日の夕方に **Fritz Haber and Japan** と題されて、ご講演をされました。S. Ted Oyama 先生も Hajo Freund 先生のところ、半年ほど滞在され、共同研究をおこなっていますから⁹ 親子3代 FHI と強いつながりのあることや田丸節郎先生が留学されていた当時のお話し、そして先生の赤ん坊の時のお写真を見せられ、日本に来られた **Fritz Haber** が日本の学術にどれだけ大きな功績を残されたか話されました。なかでも国を発展させるには科学の振興が必要であるという内容の講演は、**Fritz Haber** のドイツで英仏をしのいで国を振興させた実績に基づいていましたので、とても説得力のあるものだったそうです。この講演集を、一緒に回られた田丸節郎先生が翻訳され、“ハーバ博士講演集:国家と学術の研究 1931”を岩波書店¹⁰より出版されました。**Fritz Haber** の日本における講演や田丸節郎先生のご努力も有り、日本においては、**Keiser Wilhelm** 協会(現 **Max Plank Gesellschaft**) をモデルとした日本学術振興会(現日本学術振興機構)が昭和初期の不況のさなかに設立されました。**Fritz Haber** の学術振興が遠いアジアの小国日本に多大な影響をあたえたことを、明確に講演され、感銘深いものでした。また、お嬢様の秀子さんが100年前に田丸節郎先生が着ていたベルリン製のモーニングで颯爽と登場され、会場が大いにわきました。講演後は、すばらしい講演に会場からの拍手が鳴り止まず、田丸先生は、その後ドイツの皆さんに囲まれていました。その翌日

は **G.Ertl** 先生の75歳の誕生日記念シンポジウムが行われ、また、最終日は、式典と研究所見学 夜は、バンケットと盛りだくさんの内容でありました。また、その様子や論文は **Angewante Chemie** の特集号に掲載され¹¹、FHI100周年の本も出版されています。私自身、多くの知人と再会し、楽しい1週間でした。

FHI は、触媒と表面の最先端研究を進め、先導的な役割を行って来ました。今後はどのような方向に進むかについては、議論をしているそうです。その方向について、大変興味を持って見ていきたいと思えます。

¹ Jeremiah James, Thomas Steinhauser, Dieter Hoffmann, Bretislav Friedrich “One Hundred Years at the Intersection of Chemistry and Physics: The Fritz Haber Institute of the Max Planck Society 1911-2011”, Walter De Gruyter Inc (2011)
² 宮田親平 “毒ガス開発の父 ハーバー” 朝日新聞社 (2007)
³ 山本明夫 化学と工業,60-891 (2007).
⁴ 高良和武 “未知への旅 “ STEP, (2002).
⁵ (www.fhi-berlin.mpg.de/centenary/program.php)

⁶ D.Woehrle, “On the initiative to rename theFritz Haber Institute”
⁷日本化学遺産委員会 “田丸謙二先生インタビュー” 日本化学会 (2009); http://yokohamalken.sakura.ne.jp/sblo_files/ems-blog/image/E8AC9BE6BC94E8A681E697A8_E794B0E4B8B8_20E58C96E5ADA6E4BC9A2012_Spring.pdf
⁸ 星新一、人民は弱し官吏は強し、新潮文庫 (1978)

⁹ S.T. Oyama, H.Y. Zhao, H.J. Freund, K. Asakura, R. Wlodarczyk and M. Sierka, *J. Catal.* 285,1-5(2012).

¹⁰ F. Haber and S. Tamaru, “The lecture note of Prof. Haber, Nation and Academic Research.” 1931, Tokyo: Iwanami, <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1149313>

¹¹ *Angewandte Chemie International Edition* 50(43) 2011.